様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：２５５０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２８７９

研究課題名（和文）迷惑行為に対する言語行動: 社会文化および性格特性に関するアジア諸言語の対照研究

研究課題名（英文）Language and Action against Nuisance Behaviors: Contrastive Study of Asian Languages Regarding Social Culture and Personality Characteristics.

研究代表者
林　ひょん情（LIM, HYUNJUNG）

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号：３０４１２２９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本（J）・韓国（K）・中国（C）・マレーシア（M）の４つの言語及びそれぞれを母語とする日本語学習者を対象に、第１および第２言語場面での迷惑場面に影響する諸要因を比較検討することを目的とする。具体的には、（１）迷惑行為に対する認知（認知度）と迷惑行為に対して相手に注意をするかどうか（注意有無）はJ・K・C・Mとでどの程度異なるのか、（２）日本語学習と個人の性格特性はJ・K・C・Mの社会的迷惑行為に対する迷惑度と注意有無にどのような影響を与えるのかについて検討を行った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to comparatively examine the factors which influence nuisance settings in 1st and 2nd languages among Japanese language learners with Japanese (J), Korean (K), Chinese (C), and Malaysian (M) as their mother tongues. Specifically, we conduct an investigation (1) about how different the awareness (degree of awareness) of nuisance behavior is and whether or not they warn other who engage in nuisance behavior (warnings or lack thereof), and (2) what kind of influence of those with experience in the Japanese language and individual personality characteristics has on the degree of feeling and the warning or lack thereof against social nuisance behavior in J, K, C, and M.

研究分野：言語学

キーワード：社会的迷惑行為　アジア諸言語の対照研究　迷惑度　注意有無　社会的規範　日本語学習の影響　性格特性の影響

１．研究開始当初の背景

公共場面での迷惑行為（以下、社会的迷惑行為）に関する社会心理学の研究では、迷惑行為を「行為者が自己の欲求充足を第一に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させること、またはその行為」と定義している（吉田・安藤・元吉ほか, 1999; 斉藤，1999; 中村，2012)。このような迷惑行為が増加する背景として、吉田ら（1999）は、共同体社会の崩壊と生活空間の拡大により、相互監視システムが機能しなくなったこと、そして情報化社会への移行により、価値観の多様化が進み、他人の価値判断が優先される社会になったことをあげている。

吉田ら（1999）の指摘は、社会的迷惑行為の増加を大局的な見地から唱えた点において注目に値するが、社会規範は行為が社会的に意味づけされ、個人を超えていない限り、規範として成立し得ず、他者と共有されていることが前提となる（園田・井田・加藤, 1996)。つまり、ある種の行為が迷惑だと認知されるのは、不快感情の生起が必要となるが、加えて、それが迷惑だと判断される基準として自分だけではないという共通の意識が必要である（斉藤，1999)。そのため、迷惑行為を考える場合には、認知者側の社会文化的規範からの検討が不可欠である。

一方で対人コミュニケーションに関するこれまでの研究によって、社会的規範と言語規範は属する社会・文化によって規定されることが多く（宇佐美，2001; 三牧，2002)、自分自身に関する事柄を、言語を媒介にして他者に語る自己開示行動には個人差とともに文化差があることが明らかになってきた（守﨑,2002; 中川，2011)。自己開示行動に関する研究では、個人差とともに文化的コンテキストの重要性が指摘されるなか（末田・福田，2011)、社会的迷惑場面の言語行動に社会文化的規範や個人のコミュニケーション能力がどのように影響しているかについてはほとんど解明されていない。

社会的迷惑場面に遭遇した場合、それを知覚し、言語行動を取るかどうかを判断し、どのように注意するかを決めるという一連の行動は、ある個人の社会文化的規範などの外的要因および思いやり・対立管理・共感性などの内的要因により決まると予想される。また、第１言語(母語)と第２言語（日本語学習者など）で表現する場合は、言語行動の取り方が異なってくるのではないかと思われる。

２．研究の目的

本研究では、日本（J)・韓国（K)・中国（C)・マレーシア（M）の４つの言語及びそれぞれを母語とする日本語学習者を対象に、第１および第２言語場面での迷惑場面に影響する諸要因を比較検討することを目的とする。具体的には、(1)迷惑行為に対する認知（認知度）と迷惑行為に対して相手に注意をするかどうか（注意有無）はＪ・Ｋ・Ｃ・Ｍとでどの程度異なるのか、(2)日本語学習と個人の性格特性はＪ・Ｋ・Ｃ・Ｍの社会的迷惑行為に対する迷惑度と注意有無にどのような影響を与えるのかについて検討する。

３．研究の方法

(1)迷惑行為場面選定と迷惑認知の測定

迷惑行為は公共場面で生起するもの、個人間で見られるものなどさまざまなものがあるが、本研究では公共場面における社会的迷惑行為に注目した。社会的迷惑行為は、吉田・安藤・元吉ほか（1999)、石田・吉田・藤田ほか（2000)、谷(2008)などの社会的迷惑に関する研究のなかから、迷惑行為として判断された 18 項目を選定した（表 1)。質問紙における記述は、評定者が場面の状況が分かるように、「あなたは人通りの激しい街を歩いています。前の女性達がグループで横になって歩いています。あなたは急いでいますが、追い越すことができません」、「あなたは

電車に乗っています。ある男の人はヘッドフォンで音楽を聴いています。でも、音漏れがしてまわりに大きな音が聞こえます」などといったように、具体的に記述した。

表 1. 迷惑場面に関する 18 場面

No.	迷惑場面
1	人混みで、歩きながらタバコを吸う。
2	路上に噛んだガムを捨てる。
3	図書館で大きな声でしゃべっている。
4	散歩させている犬の糞の始末をしない。
5	人通りの激しい場所で、グループが横になって歩く。
6	煙の出ている吸殻を灰皿に放置する。
7	電車などで、混んできているのに席をつめない。
8	他人の自転車を倒しても、そのままにしておく。
9	ならんで電車やバスを待っている人たちの横から割り込もうとする。
10	授業や講演会が始まっていても、音を立てて入ってくる。
11	飲めない人にお酒をすすめる。
12	授業中、授業とは関係のないことを友達としゃべっている。
13	電車などで、乗降口付近に荷物を置く。
14	授業中に教室の廊下を大声で話しながら通る。
15	電車の中やレストランなどで、携帯電話をかける。
16	バイキング形式の食事で、食べきれないほどの料理をとってきて残す。
17	電車内で、ヘッドフォンステレオの音漏れを気にせずに音楽を聴く。
18	授業中に飲食をする。

(2)迷惑認知（迷惑度）の測定

上記のそれぞれの 18 場面に対して、日本人（n=42）、韓国人（日本語未学習者 n=50、日本語学習者 n=41）、中国人（日本語未学習者 n=49、日本語学習者 n=89）、マレーシア人（日本語未学習者 n=50、日本語学習者 n=50）のそれぞれの大学生に対し、「とても迷惑（迷惑の知覚度：５）」から「全然迷惑でない（迷惑の知覚度：１）」の１から５まで変化する尺度で、どの程度迷惑に感じるのか判断させ、迷惑度の基準とした。

(3)迷惑行為に対する言語行動の測定と検討

迷惑行為に対する言語行動については、上記の 18 項目の迷惑場面に対して、それぞれの迷惑行為者に対して注意をするのかどうかを答えてもらった。また、注意の仕方にもそれぞれ文化差があることが予想されることから、もし注意するとすれば、どのようなことばを用いるかを自由記入式による複数回答で求めた。

(4)個人のコミュニケーション能力に関する測定尺度と分析

本研究で用いるコミュニケーション能力は、「共感性：他者指向的情緒反応、他者心理の理解力、被影響性、自己指向的情緒反応」「コンフリクト・マネジメント：対立管理スタイル（意見の相違への対処パターン）」「アサーティブ・コミュニケーション：攻撃的なコミュニケーション、受身的コミュニケーション、アサーティブ・コミュニケーション」「異文化適応力：感情制御、オープンな心、柔軟性、自己受容度」「思いやり指数（NQ：Network Questions）：ネットワーク拡張能力、ネットワーク配慮度、ネットワークマインド」の合計５つの尺度を用いた。各コミュニケーション能力の尺度は、それぞれ得点化するとともに、迷惑行為に対する迷惑度と注意有無（目的変数）を説明する予測変数として用いた。例えば、ある行為に対して迷惑認知度が高い人、そして迷惑行為に対して注意をする人はどのようなコミュニケーション特性を持っている人なのかを判定する。

(5)分析方法

分析では、迷惑度に対する注意有無、迷惑場面、そして日本語学習経験の影響を総合的かつ階層的に検討するため、SPSS の決定木分析（Decision Trees Analysis）を用いた。決定木分析は、ある言語行動の選択に影響しうる複数の要因群から予測に有意な要因を選択し、有意となる諸要因の影響の強さを樹形図の形で視覚的に描いてくれる（図１）。例えば、木の上部にある要因はより強い影響力(予測力)を持ち、次のレベルには上の要因と最も交互作用の強い要因が選ばれ、枝を生長させていく。他要因との交互作用がなければ枝は伸びない。さらに、決定木分析は各要因が持つ複数の条件のうち、傾向が同じものをグル

ープ化してくれるので、迷惑度を複数の変数で予想する条件に、最適な多変量解析の手法であるといえる（統計手法については、玉岡, 2010；Kiyama, et al., 2016 を参照）。

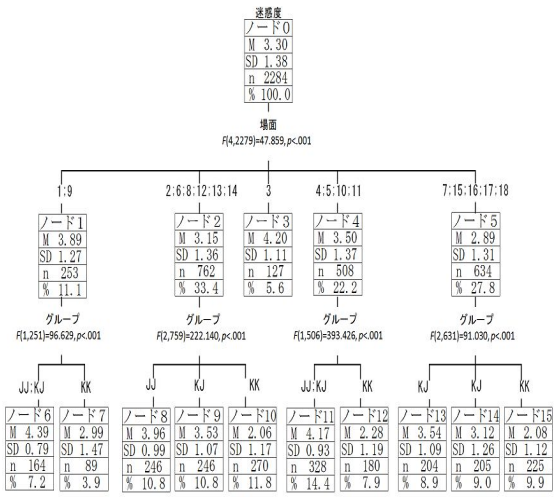

図 1. 決定木分析結果のイメージ図

４．研究成果

研究成果については主に下記の２点に絞って報告する。(1) 迷惑行為に対する認知（認知度）と迷惑行為に対して相手に注意をするかどうか（注意有無）は J・K・C・M とでどの程度異なるのか、(2) 日本語体験と個人の性格特性は J・K・C・M の社会的迷惑行為に対する迷惑度と注意有無にどのような影響を与えるのか。

分析の結果、本研究で用いた 18 項目の迷惑行為に対する迷惑度は、J(M=4.01) > M(M=3.88) > C(M=3.77) > K(M=2.47)の順で高いことが分かった。つまり、迷惑行為に対する認知に違いが見られることから、J・M・C・K 間では社会文化的規範の距離が異なることが予想される。一方で迷惑行為に対して注意する割合は、M・C（41.1%）> J（22.3%）> K（14.4%）の順で高かった。M・C が同じグループになっているのはマレーシアと中国とで同じ傾向であったことを示しており、注意行為では迷惑度の最も高かった日本人よりも中国人やマレーシア人のほうがより積極的な態度をとることが明らかになった。韓国人は迷惑度も低く、注意行動においても最も消極的な態度であった。

日本語学習経験の影響は、全体的に注意有無や場面の下に位置しており、しかも全ての場合においてその影響が見られた訳ではないことから、迷惑度を決める最も強い要因ではないことが示唆された。迷惑度を決める最も強い要因は注意有無、その次に場面の順であった。本研究では個人の性格特性に関する測定尺度について、「共感性」「コンフリクト・マネジメント」「アサーティブ・コミュニケーション」「異文化的能力」「思いやり指数（NQ）」の尺度を検討したが、分析の結果下位尺度のごく一部においてのみ有意差が見られた。本研究では結果として、迷惑度および注意有無にかかわる有意な個人の性格特性を特定するまでには至っていない。これについては今後の課題としたい。

＜引用文献＞

① 石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀・斎藤和志・森久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛（2000）「社会的迷惑に関する研究（1）迷惑認知の根拠に関する分析」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』47，25-33.

② 宇佐美（2001）「談話のポライトネス－ポライトネスの談話理論構想」国立国語研究所（偏）『談話のポライトネス（第７回国立国語研究所国際シンポジウム報告書）』9-58．凡人社

③ 斎藤和志（1999）「社会的迷惑行為と社会を考慮すること」『愛知淑徳大学論集(文学部篇）』24，67-77.

④ 末田清子・福田浩子（2011）『コミュニケーション学－その展望と視点』 松柏社

⑤ 園田寿・井田良・加藤克佳　1996　『刑事法講義ノート（第２版）』 丸沼書店

⑥ 谷芳恵（2008）「共感性が公共場面におけ

る迷惑行為に与える影響」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要』2．7-12．

⑦ 玉岡賀津雄（2010）「コーパス分析の研究例 3-語彙的・統語的複合動詞の特徴についての計量的解析」中本敬子・李在鎬・黒田航（編）『新しい認知言語学研究法入門』184-199．ひつじ書房

⑧ 中川典子（2011）「日本人と韓国人ビジネスパーソンの自己開示に関する異文化比較調査－面接調査法による質的調査の結果から－」『流通科学大学論集－人間・社会・自然編』23（2），25-44．

⑨ 中村真（2012）「社会的迷惑行為」に関する研究の動向」『江戸川大学紀要』22，79-89．

⑩ 三牧陽子（2002）「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のぽいライトネス表示：初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に」『社会言語科学』5（1），56-75．

⑪ 守崎誠一（2002）「日本人とアメリカ人の自己呈示行動ー文化的自己観と個人主義/集団主義の影響－」『ヒューマン・コミュニケーション研究』30，45-67．

⑫ 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆（1999）「社会的迷惑に関する研究（1）」Bulletin of the School of education, Nagoya University (Psychology), 46, 53-73.

⑬ Kiyama, S., Takatori, Y., Lim, H., & Tamaoka, K. (2016) From universal perceptions to diverging behaviors: An exploratory comparison among the United States, Japan and South Korea. *International Journal of Linguistics & Communication*, 4(1), 19-33.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

① 林炫情，玉岡賀津雄，黄郁蕾（2016）「外国語としての日本語学習による社会文化的規範の顕在化-迷惑行為に対する認知を例に-」『韓国日本研究総連合会・第 5 回国際学術大会［日本語学・教育分科］予稿集』，140-143．査読有

② Kiyama, S., Takatori, Y., Lim, H., & Tamaoka, K. (2016) From universal perceptions to diverging behaviors: An exploratory comparison among the United States, Japan and South Korea. *International Journal of Linguistics & Communication*, 4(1), 19-33．査読有

③ 玉岡賀津雄（2017）「実験的手法を用いた語彙習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』20，44-62．査読有

〔学会発表〕（計２件）

① 林炫情・玉岡賀津雄・黄郁蕾．外国語としての日本語学習による社会文化的規範の顕在化-迷惑行為に対する認知を例に-．韓国日本研究総連合会・第 5 回国際学術大会．釜山外国語大学（韓国、釜山）．2016 年 4 月．審査有

② 林炫情．迷惑行為に関するアジア諸言語の対照研究．韓国学研究会．広島大学（広島）．2016 年 7 月．審査無

６．研究組織

(1)研究代表者

林　炫情（LIM HYUNJUNG）

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号：30412290

(2)研究分担者

玉岡　賀津雄（TAMAOKA KATSUO）

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：70227263